

中学生の高校進学における 友人環境継続志向

——ジェンダー・人間関係・メリトクラティック指標に着目して——

熊谷 信司（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

◆ 要約

- ◎進学先の高校は「同中」出身者が多く進学する学校がよいかどうかという「友人環境継続志向」には、現状での中学校での人間関係や自己認識という側面と、メリトクラティックな達成度合いや志向性という側面の双方がせめぎ合っている。
- ◎上記の規定度合いの構造にはジェンダー差も大きい。
- ◎友人環境継続志向は、将来観（職業観）や社会観とも関連を持ち、ある種のリスクを伴う部分もあるが、一方で「なんとかやっていく」ための資源としても解釈できる。
- ◎こうした分析を通じて、中学生・高校生をより連続したものとしてとらえていくこと、また、進路や移行という問題に際して、選抜的側面と生徒文化的側面の双方を統合的に考えていく必要性を提示する。

1 問題設定

大多数の中学生にとって、中学卒業後には高校への移行が待ち受けている¹⁾。特に、今回の調査対象者はいずれも3年制公立中学校に通う生徒であるので、中学生たちは高校受験を通じて様々な高校へと進路が分かれていくことになる。

中等教育期を考えるにあたっては、こうした進路・選抜・配分という視点も重要であるとともに、中学生や高校生の日常生活においては、学校（クラスや部活動）や地域などにおける友人やピアグループの存在も重要である。ただ、これまでの研究では、友人関係に関する研究は、主として学校内における適応の問題、あるいは若者文化の接触にかかわる問題といった、生徒文化的な要因として扱われることが多かった。逆に言えば、中等教育

期の進路という視点から見た場合は、あまり友人や人間関係という要素は大きな課題として検討されてはこなかった。しかし、友人関係はその後のライフコースにおいても、ある人が生きていく際の様々な諸資源や影響力の源泉となり得る。その意味では、友人関係を進路あるいは移行の問題として考えていくことにも一定の意義があるだろう。

とはいえ、これまでは工藤（2010）が指摘するように、中学生・高校生を連続してとらえるという視点が少なかった面もあるが、中学校から高校への移行は、中高一貫校や、事実上大多数の生徒が同じ中学校から同じ高校に進学するような地域を別とすれば、それまでの人間関係についても大きく変化が生じることも意味する。本稿ではこうした軸から、中学生たちが高校進学を考える際に、友人関係の継続ないし変革をどのように見ているか

を検討し、中学生の進路をめぐる議論をとらえ直すことを目的とする。

2 先行研究の検討

日本における教育社会学分野では、進路や選抜に関する研究には多くの蓄積がある。これらの研究で中心的に扱われてきたのは、家庭階層や学業成績、学校タイプなどの、いわば「ハード」な変数である。むろんこれらが非常に重要な変数であることは言うまでもないが、それらだけですべて説明できるわけではない²⁾。

実際、近年の若者研究をいくつか見てみると、新谷(2002)はいわゆる上昇移動モデルに対し、地域移動を嫌い、身のまわりの人間関係で生きていく「地元つながり志向」の若者の生活世界と職業意識を描いている。土井(2009)は、今日の若者に広く共有されている心性として「出身中学の仲間を『同中』と呼んで卒業後もずっと緊密な関係を保つなど、『地元つながり』への愛着の強まり」(p.29)があることを指摘している。

こうした人間関係を媒介としたつながりは、一種の資源、あるいは資本(社会関係資本)となり得る。このような部分に着目することは、学歴達成を通じて終身雇用を前提とした正社員へと雇用されていく、従来の日本のシステムで「標準」的とされてきた層の外にいる「第二標準」の人々が、少ない資源で「何とかやっていく」(中西・高山編 2009)ライフコースの様子を描き出す視点にもつながっていくと考えられる。とりわけ学校から仕事への移行過程が個人化されてきている近年では、「地元ネットワーク」の中で形成されるピア関係が、若者の表出的機能に大きな役割を果たしているという分析もある(乾 2010)。

また、話を中学生に戻せば、進路という主として高校受験の問題が想起されるが、中学生の日常生活に寄り添って見た場合、その日常生活は受験のために構造化されたものではないという指摘もある。森永(2004)によ

れば、日常の勉強と受験との間には連続性が乏しく、また「中学生にとって『勉強』や『受験』は、『アイドル』や『好きな異性』などといった『楽しいこと』とともに彼らの日常を構成する一要素に過ぎない」(p.60)という。

そうした意味でも、中学生の進路を考える際にも、上述したハードな変数以外の軸もあわせて問う必要もあるだろう。今回、本稿のできる分析は非常に限られたものであるが、進路という問題においても、人間関係(本稿では友人関係)という軸も配置して、中学生の高校進学への意識を検討していくことが必要と考えられる。

具体的には「進学する高校は、できれば同じ中学校出身の人がたくさんいるほうがいい」(Q43B、以下「友人環境継続志向」と呼ぶ)を主たる従属変数として用いる³⁾。上述した言葉で言えば「同中」志向の一端を探ると言うことができよう。ただし、ここで用いるQ43Bのワーディングが中学時代の緊密な関係の友人のみを指すというよりは、そうした友人も含みつつ、広い意味での中学校での人間関係ととらえたほうがよいと判断し、本稿ではこの質問に肯定する意識を「友人環境継続志向」と呼んでおくことにする。

3 仮説

前節までで述べた問題を具体的に検討していくため、以下のように仮説を設定する。

- 理論仮説1：ジェンダーが友人環境継続志向に影響する。
- 作業仮説1：女子のほうが男子より友人環境継続志向が高い。

人間関係や友人選択に関して、女子のほうが日常のリソースを多く割いているということは様々に指摘されている。実際、先行研究によれば、都市部の中学生女子は、男子に比べて同じ中学の友人と一緒に高校に進学し、その関係性を継続する傾向があるとされる

(工藤 2010)。そこで、この友人環境継続志向のジェンダーによる違いを確認する。

●理論仮説 2：現在の友人関係や自己認識が友人環境継続志向に影響する。

○作業仮説 2-1：クラス内友人関係に満足している生徒ほど、友人環境継続志向が高い。

○作業仮説 2-2：「キャラ替え」志向が低い生徒ほど、友人環境継続志向が高い。

表出的な側面から考えると、現在の中学校における友人関係が良好であれば、その人間関係を高校でも維持したいと願うのは自然なことであろう。ここでは、学校生活で中心的な人間関係である、クラスでの友人関係を代理指標として、作業仮説 2-1 を検討する。

また、自己認識という面に着目すると、現在の中学校における自分の「キャラ」それ自体の変更を特に望まない生徒は、現在の友人環境の継続を望み、逆に「キャラ」を変えたいと感じている生徒は高校において周囲の友人環境そのものも変更を望む割合が高まると考えられる。そこで、作業仮説 2-2 を検討する。

●理論仮説 3：メリトクラティックな達成度合いや志向性が友人環境継続志向に影響する。

○作業仮説 3-1：校内成績下位者ほど、友人環境継続志向が高い。

○作業仮説 3-2：現在志向な生徒ほど、友人環境継続志向が高い。

選抜という側面から見ると、学業の達成度合いが高い成績上位者では、将来的にも高い学歴獲得という目標に親和的と考えられ、中学校時代における友人関係の維持・強化への比重は相対的に抑制される部分があると考えられる。成績下位者では、高校進学に際しても上位者のようなメリトクラティックな感覚が相対的に低くなると考えられる。そこで、まず作業仮説 3-1 を検討する。

また、学業・学歴達成という目標に対する

志向性という意味からは、仮に成績という明確なアウトプットにつながっていなくても、あるいは同じ成績層内においても、現在志向的か将来志向的かという違いによって、友人関係の維持・強化への比重が変わってくるのが考えられる。そのため、つづいて作業仮説 3-2 を検討する。

以上を踏まえ、仮説 1～3 まで個別に検討した要因間の関係を見るため、多変量解析を行う。

それらの分析の後、友人環境継続志向と将来（職業）意識や社会意識との関連も探索する（これはどちらも将来に対する意識どうしの関連なので、因果関係の特定というよりは相関関係を確認する）。

4 分析

友人環境継続志向を持つ生徒（志向層）と持たない生徒（非志向層）は、全体でおおよそ 6：4 の比率である。友人関係の実態としては、クラスで親しい友人の数が 10 人以上である生徒の割合は 42.1%：27.6%（友人環境継続の「志向層：非志向層」の比。以下同様）、また部活動で親しい友人の数が 10 人以上である割合は、45.8%：31.8%と、いずれも前者の割合が高い。一方、将来の希望職業については「はっきりと決まっている」＋「なんとなく決まっている」の合計で 40.2%：50.4%と、友人環境継続志向を持たない生徒のほうが高い。こうした実態も踏まえつつ、以下で仮説を順に検討していく。

4.1 ジェンダーによる友人環境継続志向の違い

仮説 1（ジェンダー別による友人環境継続志向）のクロス分析の結果を表 1 に示す。

仮説に反して、今回の結果ではむしろかなりのポイント差で男子のほうが友人環境継続志向が高い結果となった。これは、今回の調査項目では、先述したように同中出身者が

表1 性別×友人環境継続志向

性別	友人環境継続志向		合計	N
	あてはまる	あてはまらない		
男子 (%)	65.9	34.1	100.0	(1416)
女子 (%)	51.3	48.7	100.0	(1387)
合計 (%)	58.7	41.3	100.0	(2803)

0.1%水準で有意 p=0.000

表2 性別×クラス内友人関係満足度×友人環境継続志向

性別	クラス内友人関係満足度	友人環境継続志向		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
男子	満足層 (%)	69.2	30.8	100.0	(1163)
	不満層 (%)	50.6	49.4	100.0	(249)
	合計 (%)	65.9	34.1	100.0	(1412)
0.1%水準で有意 p=0.000					
女子	満足層 (%)	55.5	44.5	100.0	(1082)
	不満層 (%)	36.4	63.6	100.0	(305)
	合計 (%)	51.3	48.7	100.0	(1387)
0.1%水準で有意 p=0.000					

「たくさんいるほうがいい」かどうかを尋ねており、人数の多寡ではなく、特定の（少数の）友人との深いつきあいを継続したい場合とは異なることがあるためとも考えられる。

いずれにしても友人環境継続志向にはジェンダー差がかなり大きいことが確認されたため、以下のデータはジェンダー別に提示していく。

4.2 現状の友人関係や自己認識から見る友人環境継続志向

まず、作業仮説2-1（クラス内友人関係満足度と友人環境継続志向）の結果を表2に示す。

ここから、男女ともに、現在のクラスにおける友人関係、すなわち現在の学校生活で中心的な人間関係の状況によって、その継続を望むかどうかの志向は異なることがわかる。よって、作業仮説2-1は支持される。

次に、作業仮説2-2（キャラ変更希望と友人環境継続志向）の結果を表3に示す。

男子では「キャラ替え」を志向するかどうか

と友人環境継続志向との間に有意な差は見られなかったのに対し、女子では有意な差が見られた。キャラ替えを希望する層は、現状の自分のコミュニケーションスタイルに何らかの不満やネガティブな要素を感じていると考えられるが、特に女子において、そうした層が人間関係の環境変容を望む割合が高まっており、ここでもジェンダーによる構造の違いが見られる。

4.3 メリトクラティックな達成・志向性から見る友人環境継続志向

作業仮説3-1（校内成績と友人関係継続志向）の結果を表4に示す。

男子では、校内成績上位層ほど、友人環境継続志向が下がる。女子では、おおむね男子と傾向は同じではあるが、やや中・下位層の間では差が小さい傾向が見られ、全体での有意差はなくなる（10%水準では有意）。

次に、作業仮説3-2（現在/将来志向と友人関係継続志向）の結果を表5に示す。

男女ともに、現在志向の生徒のほうが友人

表3 性別×キャラ替え希望×友人環境継続志向

Q02A×Q43A×Q43B

性別	キャラ替え希望	友人環境継続志向		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
男子	希望層 (%)	63.6	36.4	100.0	(486)
	非希望層 (%)	67.1	32.9	100.0	(927)
	合計 (%)	65.9	34.1	100.0	(1413)
有意差なし p=0.185					
女子	希望層 (%)	41.7	58.3	100.0	(489)
	非希望層 (%)	56.4	43.6	100.0	(892)
	合計 (%)	51.2	48.8	100.0	(1381)
0.1%水準で有意 p=0.000					

表4 性別×校内成績(3段階)×友人環境継続志向

Q02A×Q07B×Q43B

性別	校内成績 (3段階)	友人環境継続志向		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
男子	下位層 (%)	70.8	29.2	100.0	(586)
	中位層 (%)	64.4	35.6	100.0	(571)
	上位層 (%)	60.2	39.8	100.0	(241)
	合計 (%)	66.4	33.6	100.0	(1398)
1%水準で有意 p=0.006					
女子	下位層 (%)	54.1	45.9	100.0	(573)
	中位層 (%)	51.2	48.8	100.0	(570)
	上位層 (%)	44.8	55.2	100.0	(230)
	合計 (%)	51.3	48.7	100.0	(1373)
有意差なし p=0.058					

表5 性別×現在/将来志向×友人環境継続志向

Q02A×Q49×Q43B

性別	現在/将来志向	友人環境継続志向		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
男子	将来志向 (%)	60.4	39.6	100.0	(680)
	現在志向 (%)	71.4	28.6	100.0	(716)
	合計 (%)	66.0	34.0	100.0	(1396)
0.1%水準で有意 p=0.000					
女子	将来志向 (%)	42.0	58.0	100.0	(583)
	現在志向 (%)	58.3	41.7	100.0	(786)
	合計 (%)	51.4	48.6	100.0	(1369)
0.1%水準で有意 p=0.000					

環境継続志向の割合が高く、仮説3-2は支持される。詳細に見ると、女子のほうが現在/将来志向の別によるポイント差が大きく、この志向性の違いによる友人環境継続志向との連関が強い。

4.4 友人環境継続志向の規定要因

ここまでいくつかの主要な側面について個別に検討を行い、ジェンダー等の若干の構造の違いには留意しておく必要があるが、おおむねそれぞれの独立変数に対しては仮説に沿

表6 友人環境継続志向の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	男子		女子	
	偏回帰係数	オッズ比	偏回帰係数	オッズ比
経済階層	-0.055	0.947	-0.064	0.938 +
文化階層	-0.032	0.968	-0.168	0.846 ***
クラス内友人関係満足度ダミー	0.780	2.181 ***	0.732	2.079 ***
キャラ替え希望ダミー	-0.057	0.945	-0.532	0.587 ***
校内成績	-0.160	0.852 **	-0.078	0.925
現在志向ダミー	0.375	1.455 **	0.577	1.780 ***
(定数)	0.606	1.833 **	0.074	1.076
Nagelkerke決定係数	0.056		0.108	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000	
N	1369		1350	

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

った分析結果が得られてきた。次に、それらの全体的な規定度合いの影響の強さを見るため、男女別にロジスティック回帰分析を行い、結果を表6に示す。独立変数については、前項までのクロス分析で使用した変数と、階層変数（経済階層、文化階層）を投入した。使用した変数の詳細な定義は注を参照いただきたい⁴⁾。

ここから、男女ともに友人環境継続志向に最も影響を与えるのは現状の中学校における人間関係、すなわちクラス内友人関係満足度であり、中学生にとって、進学先の高校をイメージするときにも現在の人間関係の状況は大きな影響を持っていることがわかる。

一方で、クロス分析からも示唆されていたように、男女の規定要因の違いにも着目する必要がある。男子ではクラス内友人関係満足度以外に、仮説3で検討したメリトクラティックな要因である現在/将来志向と、校内成績が有意な影響を及ぼしている。女子でも、現在志向ダミーは有意に影響を及ぼしているが、校内成績は有意ではない。逆に、男子では有意ではなかったキャラ替え希望ダミーが有意にマイナスに作用している。このように、メリトクラティック要因と人間関係要因の効果が男女で若干異なることが、規定構造の特徴として指摘できる。また、女子では階層要

因が直接に効果を及ぼしている。

なお、先行研究の節でも述べたように、「地元」という言葉に表れているような地域そのものの持つ効果も確認しておく必要がある。ここでは地域を中学校の学区域としてとらえ、学校票において学区域の特徴を尋ねた質問（GQ5）から、「古くからの住宅地」「新興住宅地」「マンションなどの集合住宅地」「商業地域」「工業地域」「農山漁村地域」に分類した⁵⁾。これらの学区域変数を表6のロジスティック回帰分析に組み込んだ分析も行ったところ（紙幅の都合で表は省略）、地域による独自効果も一部で確認された一方、地域要因を統制しても表6のモデルに使用した個人要因の効果には大きな変動をもたらさなかった⁶⁾。

4.5 将来意識・社会意識との関連

以上を踏まえた上で、最後に高校進学における友人環境継続志向の違いが、さらに広い意味での将来意識や社会意識などどのような相関関係があるかを検討してみたい。表7は、友人環境継続志向の有無と、将来意識・社会意識の関係をクロスさせた（紙幅の関係上、スコアはそれぞれの将来意識・社会意識の「あてはまる」計の値）。また、仮説3や多変量解析でも見たように、メリトクラティックな要因の影響も確認できたため、それを

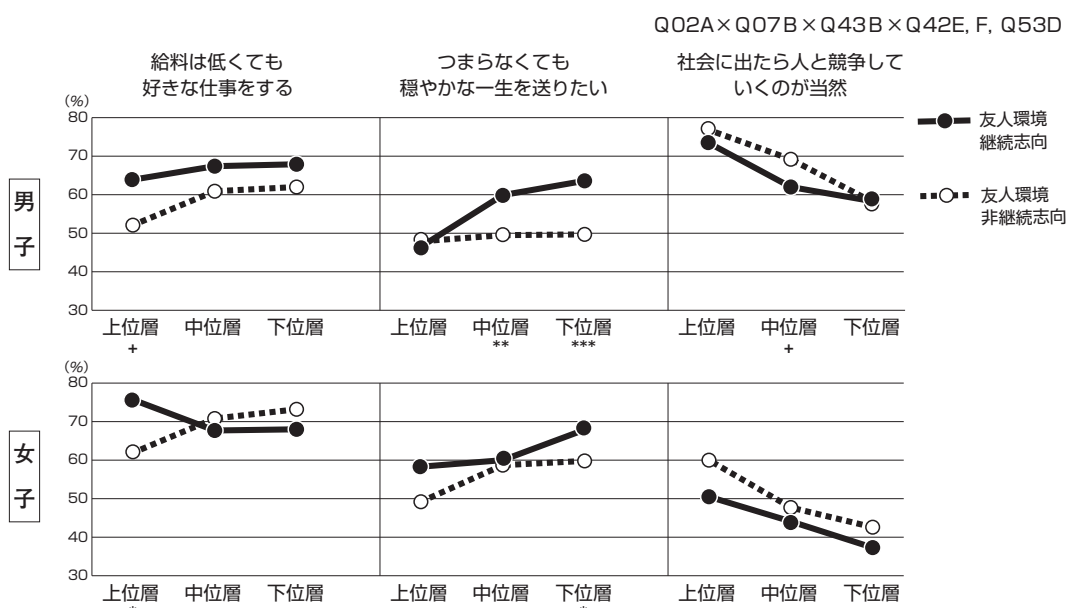
表7 性別×友人環境継続志向×将来・社会意識（それぞれ「あてはまる」計のスコア）

Q02A×Q43B×Q42E, F, Q53D

性別	友人環境継続志向	給料は低くても好きな仕事をする	つまらなくても穏やかな一生を送りたい	社会に出たら人と競争していくのが当然
男子	あてはまる (%)	67.0	59.2	62.0
	あてはまらない (%)	59.5	49.0	67.2
	合計 (%)	64.5	55.7	63.8
	N	(1404)	(1403)	(1391)
	有意水準	**	***	+
女子	あてはまる (%)	69.1	63.3	42.0
	あてはまらない (%)	69.7	57.3	48.2
	合計 (%)	69.4	60.4	45.0
	N	(1379)	(1376)	(1373)
	有意水準		*	*

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

図1 性別×校内成績×友人環境継続志向×将来意識・社会意識（それぞれ「あてはまる」計のスコア）



注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

統制した（ここでは校内成績で統制）。変数が多くなるので、傾向が概観できるよう、男女別にグラフにしたものが図1である。

表7から、将来の職業観に関しては、「給料は低くても好きな仕事をする」、すなわち「やりたいこと志向」とでもいうべき意識において、男子では友人環境継続志向層のほうが肯定度が高い。また、「つまらなくても穏やかな一生を送りたい」、すなわち「平穩型人生志

向」とでもいうべき意識では男女ともに友人環境継続志向層のほうが肯定度が高い。社会意識については、「社会に出たら人と競争していくのが当然」という競争意識において、男女とも友人環境継続志向層のほうが肯定度が低い（男子は有意水準10%の場合）。

さらに図1で校内成績層別に見ると、「やりたいこと志向」は、男女とも成績上位層でのスコア差が大きい。この意識は、確かにチ

チャレンジ性はあるものの、ともすれば不利な雇用環境や経済状況などに置かれる危険も指摘されている志向性であろう。成績上位層では、従来の将来観でそうしたリスクを回避しようとする層（＝友人環境の非継続志向に多い）と、そうでない層とのせめぎ合いが起きている可能性がある。

「平穩型人生志向」は、男子では成績中位層と下位層で、女子では下位層のみで、それぞれ友人環境継続志向を持つ生徒のほうが高く肯定している。この質問は、大きな地域移動や、自分の生活世界で親しみのない職業への挑戦といったものを積極的に目指さない志向性と考えられる。成績が下位になるにつれ、メリトクラティックな上昇志向から遠くなっていると考えられるが、友人関係継続志向を持つ生徒のほうがさらにこの傾向が顕著となっている。もちろん、それを単純にマイナスと言うこともある面からはできるだろうが、他方、それでも友人関係を道具的ないし表出的な資源として利用して「なんとかやっっていく」ことができたとしたら、それは否定的なことでもないだろう。したがって、この意味については、より質的な側面なども含めて慎重に解釈する必要があると思われる。

5 まとめと課題

本稿は、中学校から高校への移行を考える際に、学校の友人に代表されるピア関係の状況をどのように中学生がとらえているかについて、「友人環境継続志向」の指標を用いて検討してきた。結果として、第1に、高校生活のイメージも、現在のクラス内友人関係満足度など、中学校における現状の人間関係の状況が大きく影響している。第2に、現在／将来志向といったメリトクラティックな達成志向によっても影響度合いが変わってくる。第3に、ジェンダー別に見ても構造の違いがあり、男子のほうが現在の校内成績など学業達成状況によって友人環境継続志向が有意に影響を持つ一方、女子ではキャラ替え志向に

見られるように、さらに自己認識・コミュニケーションをめぐる点も影響力を持っている。第4に、友人関係継続志向の違いは、中学生の将来意識・社会意識とも関連がある。これは、ある種のリスクを伴う部分もあるが、一方で「なんとかやっっていく」ための資源としても解釈できうるだろう。

こうした分析を通して考えるべきなのは、第1に、冒頭でも指摘したように、中学・高校をより連続したものとしてとらえていくこと、第2に、その際に必要なのが、進路や移行という問題に関しても、近年の若者の置かれた状況などを踏まえると、成績などの選抜的側面のみならず、人間関係などの（生徒）文化的側面の双方を統合的に考えていく視点である。本稿で検討できたことは極めて限定的なものに過ぎないが、こうした枠組みを発展させていくことで、教育実践や若者支援も、特定の機能的価値観に基づいた一方的な押しつけになってしまったり、逆に表出面を強調しすぎることによって構造的な問題から目をそらしてしまったりすることに対して注意を喚起できるのではないだろうか。

分析上の限界・注意点としては、第1に、4.1項で触れたように、従属変数の質問のワーディングは、限定された友人との深いつきあいを高校でも継続することを求めている場合、必ずしも肯定的な回答になっているとは限らず、その点でジェンダーによる構造の違いも留保すべき点があること、第2に、本稿の分析は環境としての希望であって、実際の進路選択・決定のプロセスとは必ずしも同一視できるものではないことなどが挙げられる。

政策的・制度的な状況から考えても、近年は公立の6年制中等学校（中高一貫校）なども全国的に設立されてきており、神奈川県でも2010年度現在、2校の公立中等教育学校が開校している（神奈川県 2010）。そうした近年の動きを鑑みても、中等教育期の若者の生活と進路をめぐる問題は古くて新しい問題と言えるだろう。

<注>

- 1) 2008年度の神奈川県全体での中学生卒業生における高校進学率は、同年度の全国平均とほぼ同じ97.8%である(文部科学省 2009)。
- 2) たとえば、高校生の研究ではあるが、中村ほか(2009)は、従来の進路選択の議論がトラッキングやアスピレーションなど垂直的な序列構造との関連を問うものが中心であったと指摘した上で、進路選択に際しての地域感覚(ローカリズム)への着目を示唆している。
- 3) 本稿では、高校への進学を希望する生徒のみならず、全生徒を分析対象とした。その理由は、第1に、本稿で用いるQ43の質問は、中学卒業後の進路予定にかかわらず「あなたは、高校に進学するとしたら」という仮定で全生徒に尋ねていること、第2に、現時点での中学卒業後の進路希望(Q40)を見ると、中学卒業後に就職ないし家業手伝いを予定していると答えた生徒は男子1.2%、女子1.4%と少数であること、第3に、今後中学卒業までの間にこれらの生徒の進路希望も変化する可能性もあること、などを考慮したためである。
- 4) 投入した変数の定義は次の通りである。
 - ・従属変数: Q43B「進学する高校は、できれば同じ中学校出身の人がたくさんいるほうがいい」(4件法)において、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「1」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「0」の2値に変換した。
 - ・独立変数は下記の通りである。
 - ①「経済階層」: Q30(家庭における所有財)の個数(0~8)。
 - ②「文化階層」: Q31(家庭の蔵書数)の実数(100冊単位に変換。すなわち0、0.2、0.5、1、2、3、4.5)。
 - ③「クラス内友人関係満足ダミー」: Q10B「クラスの友だちに満足している」(4件法)において、Q43Bと同様の処理。
 - ④「キャラ替え希望ダミー」: Q43A「高校生になったら、今と違うキャラでいきたい」において、Q43Bと同様の処理。
 - ⑤「校内成績」: Q07B(校内成績)の5段階得点(1=下のほう~5=上のほう)。
 - ⑥「現在志向ダミー」: Q49「あなたの考え方は、次のどちらに近いですか」(2件法)において、「将来のことはともかく、今が楽しければよい」の回答者=1。
- 5) GQ5では7校の回答が「その他」であったため、具体記述から判断して、より伝統的な特徴が残る側を優先して回答をリコードした。たとえば、「農家+新興住宅地」のような場合は、時間的に農村が先に存在していたと考えるのが自然なため、「農山漁村地域」に分類している。地域性の判断は学校質問回答者の主観であることに加え、このような「その他」回答の処理問題もあるので、学区域特徴はあくまで本稿では参考程度の扱いにとどめる。
- 6) 学区域の特徴をダミー変数で表6のモデルに追加投入した場合、男子では「新興住宅地ダミー」(オッズ比0.668)および「農山漁村地域ダミー」(オッズ比1.563)がそれぞれ5%水準で有意、女子では「新興住宅地ダミー」(オッズ比0.640)のみが5%水準で有意となった(基準変数は「古くからの住宅地」)。

<引用文献>

- 新谷周平、2002、「ストリートダンスからフリーターへ——進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』71: 151-170。
- 土井隆義、2009、『キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』岩波書店。
- 乾彰夫、2010、『<学校から仕事へ>の変容と若者たち——個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店。
- 神奈川県、2010、「県立中等教育学校の設置」、<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/kokokyoiku/kenritu/syorai/syorai/chuko/chuko.html> (2010年8月2日アクセス)。
- 工藤保則、2010、『中高生の社会化とネットワーク——計量社会学からのアプローチ』ミネルヴァ書房。
- 文部科学省、2009、「中学校卒業後の状況調査 進路別卒業生数」(学校基本調査)、<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/Xlsdl.do?sinfid=000006196908> (2010年7月15日アクセス)。
- 森永智子、2004、「進路選択プロセスにおける中学生の意識構造」『甲南女子大学大学院論集(人間科学研究編)』2: 51-61。
- 中村高康・片山悠樹・西田亜希子・藤原翔・岩田考、2009、「都市部高校生の進路選択とローカリズム——高校3年間の進路変容過程に関する継時的研究(4)」『日本教育社会学大会発表要旨集録』61: 183-184。
- 中西新太郎・高山智樹編、2009、『ノンエリート青年の社会空間——働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店。